

## おわりに

本校の自慢の一つに、室生犀星が作詞した校歌があります。その校歌の斉唱を初めて耳にしたとき、不思議な衝撃・感動があったことを覚えています。

犀星自身、作詞にあたっての苦労や思い入れを、解説のなかで次のように記しています。

なるべく校歌らしくない校歌。

校歌というもののしんをねらったもの。

少し難しいという側から、かんたんにやさしくしようとすると、骨のないものになるとうとする。きりっとするには難しさときびしさがあるように思われます。

また、作詞された昭和28年、当時の校長先生と遣り取りされた書簡のなかで、歌詞を仕上げた経緯にふれ「何篇もつくったものを破り、詞となる前の上澄みのようなものを選びました。」とあります。

50年以上経てなお、歌詞の一節「読み書きはあかるく」「よき文つづり」「よき言葉をまもり」は力強く、そして新しく、感動を呼び起こします。また、歌詞全体に本校の目指す子どもの姿が凝集されているように思われます。

新しい学習指導要領の完全実施に向け、これまでの研究テーマ「知識創造の力を育む授業」から、新たに「であう・つながる・うまれるコミュニケーション」に変え、一年次を迎えています。重視されている思考力・判断力・表現力の育成に向けて、望ましいコミュニケーションが成立している状態にはどのような条件があるのか、個々の教師が探り始めているところです。個々の課題に基づく多くの実践検証を蓄積し、その上澄みから教育のしんをねらう何かが見えてくることを期待しています。

研究協議の折には、皆様から多くのご示唆をいただけることを願っております。

皆様方の忌憚のないご意見、ご指導をどうぞよろしく願いいたします。

金沢大学附属小学校

副校長 山下 尚

